

長与又郎日記 昭和十三年九月

凡例

1. 校訂に当たって、漢字は原意をそこなわいかぎり現在一般につかわれている簡略体を用いた。
2. 明白な誤字、脱字は脇に「レ」で示した。
3. 片仮名は原則として平仮名に統一し、変体仮名は普通体平仮名になおした。
4. 本文中判読不能、欠けている箇所は□で示した。
5. 濁点、句読点は適宜付した。

昭和十三年

九月一日 木 颱風

二百十日 大震災災第十五周年

昨夜半より吹き始めたる颱風は一時より四時の間に極度に達し寝る能はず。近年稀有の暴風、被害は嘸かし莫大ならんと想像し居たるが、朝刊、夕刊、ラヂオの報ずる所は此想像を遙かに超へたものであつた。颱風の中心は常道を離れて房総方面より転じて東京湾に入り東京、

中野 実
照沼 康孝

横浜を中心とする関東一帯に猛威を發揮し尽したり。最低気圧 $726\frac{1}{10}$ 、風速 $37.5\frac{m}{m}$ (横浜)として空前のことなり。

東京街路樹八万五千本の六割は倒れ、内八千は廢物となりたるに見て一般を知るべし。水道、電気之故障多く交通所々杜絶す。浸水家屋東京に於て十万を超ゆ。多くは江東方面なり。人生は損失比較的少かりしは不幸中の幸なり。

十時半癌研、昨夜来水出せず、電気なく困難を極め居れり。樹本の倒れたるもの亦多し。

東氏と語る。一時帰宅。

夜南氏来る。

朝江口、桧山両氏見舞之為来る。

九月二日 金 曇雨

大学、一々六時懷徳館、学部長会議。

余、去土曜日(の)文部省側との懇談会に於ける各学部長と先方との慰酬に就て、更めて精確なる報告を聞き、此会合によりて受たる諸氏の感想を聞き、今後如何に進行すべきやと諮る。

佐藤。文部省提出の参考案なるものを認めて、進むや否やが先決問題なり。

石原。根本方針は充分認められて居るから。

九月三日 土 晴

十時懷徳館

京都帝大幹部との会合、

京都、平野総長事務取扱、宮本法学部長、小島文学部長、高田経

済学部長、野満理学部長、中村書記官、

東大、寺沢氏を除く各学部長、江口氏

余、先づ遠来の労を謝し、京都帝大が其後取りたる態度及昨日文部大臣以下との会見内容を聴く。

平野、高田、宮本氏主として語る。

京大は大学制度調査会(各学部三名)を設け、此会に於て同大学の取る方針を凝議し来り(毎週一回参集)しが、文部事務当局之言時に変更あり、直接大臣と会談の必要を感じ昨日の会合となりしこと。京大は大体東大と同じく現行制度は変更の要なきのみならず、大学使命遂行その存置は必要なること、運用に於ては考慮することの大方針定まり、昨日も可なり痛烈なる質問を連発せし如し。殊に宮本氏は数によりて決することは合議制に於て必要欠く可らざること、枢密院の如きも多数に依りて決すとなり居ることなど述たる如し。

文部省側は次官以下は無言、大臣独り答弁せるも論理不明確、只「筋を立てる」「^{マツ}堅」の統制を主張せしよし。結局双方考慮するといふことにて袂れたるが、京大側は京都出発前種々考へ来りし応酬の案は文部省の態度が余りに著しく変化し居たるに驚きしとの如し。

余及各学部長より東大のとり来りし態度、両度の懇談会の経緯より、起草委員を依嘱して原案作製に取掛ることを述べ、各帝大が連絡を取り、少くとも総長候補推薦に関しては略同一様式とすることが望ましきこと(丹羽氏)等を述べ懇談数刻、午餐を共にし一時半散会す。文部省は東西両大学が殆んど同一の強硬態度なるため意気消沈、今は只面目を立てることに腐心し、会議の前夜山川氏は宮本氏と懇談、昨夜は省内会議を開きたる由。去月十二日の東大との懇談会に於ける大臣の訓辞は痛く東大を刺戟し、ますく硬化の原因となりしに鑑みたるものと見へ、昨日は訓辞はなく、直に質問に入りし由なり。夜江口氏、山川氏と会談の内容を報ず。大臣は頗る焦燥し居る様子なり。

九月四日 日 晴

久し振に快晴なり。市内郊外相当の出入り。街路樹の大部分は一応々急手当又は済みたり。自邸之倒壊樹木も此朝五人之植木屋の手にて一通り整備せり。午後野球見物。

九月五日 月 曇

第二の颱風は南洋に発生し、今日は関西方面の何処かを襲ふ様子な

り。此度は関東は大した事ならざるべしといふ。

大学、

東氏来、過日余の打開けたる問題に就て内田、東両氏は同感なるを報ず。

清水宮繕課長より震災復旧計画其他が案外好調に進み居ること、過日の颱風による大学の被害（バラック建築、塙、樹木等）は約四万円に達し、会計課長と談合の上適當の処置を取りつゝあること、検見川土地を千葉市より大学に譲るための形式が略整ひたること及土地見積類中に樹木が計入せられざりしを發見し、之の訂正を終り、総額約二十八万円として文部省との交渉を開始するに至りしこと等を語る。配属将校鈴木中佐出征の挨拶、新任配属将校^{ワキ} 大佐（予備騎兵）就職の挨拶。

石本地震研究所長北支より帰り、宣化の鉄鉞が大治の約十倍の埋藏量を有す、現に興中公司には日に約六百噸の採掘を為し居ることを語る。

夜坂口教授来診、南博士より余の既往の健康状態を充分に聞きたる上にて慎重に診察の上、

兩三年前より度々起つた眩暈其他の症状は脳貧血に基くものにして脳充血には非ず。其原因は単に胃の故障に在るに非ず、長く直立する時、胃之膨滿せる時等内蔵に鬱血、充血ある時に起るものなり。小脳動脈の攣縮又は内臓出血に基因するものには非ざるべし。而して精神過勞之時は此二少の原因にて貧血症状を起すを以て、今後配

慮を要する事件發生するに於ては頻々發作起ること疑なし。結論を謂へば総長の職を離るるに非れば到底回復の見込なし。

との事なり。願れば総長就任之時知友之多くは余の健康状態を最も氣遣い、余も此点に就て不安ありしも、一度多数同僚の推挙を受けたる以上、自己を犠牲として違つて見るより外なしと決心したるなり。爾来健康には可成の注意を払いたるが、夏を山中に過したる時は秋之末頃までは元氣に仕事を為し得るも、冬休暇頃となると必ず種々の故障起り、殊に一昨年正月元旦癡研にて仆れたる後は貧血發作は或は旅行中に、或は繁忙の際に屢々起り、時には何等の認むべき原因なくして起り、過去二ヶ年に於て自宅に静臥せしこと、大学より坂口、茂上氏等附添で帰宅せることも数度あり。昨秋以来経済学部之紛糾は一層此状態の發生を頻々たらしめたる上、今春は不幸にして中耳炎に罹り入院、最中に大内事件の發生となる。学内外の事情險惡、大学未曾有の難局に遭遇したる上、此度之に加へて文相の爆彈宣言となり、爾来一ヶ月半あらゆる努力を為し來りたるが、其間に於て大小の發作を起せること数ふ可らず。只意氣と責任感とのみを以て今日に及びたるなり。

今や最後の決心を為す時機到来せり。

此日道夫、八重子山中を引上げて帰京す。

〔欄外・健康状態!!〕

九月六日 火 曇風雨

昨日午後の颱風は四国より関西の一部を通過して日本海に出づ。関

東は其余波を蒙りて輕微の風雨に止まる。

大学、

内村教授来、脳研究緒言に関して語る。野球部の現況を聞く。今年
は内村氏の指導にて相当面目を改むることとなるべし。

桑田、寺沢両学部長と語る。

九月七日 水 晴

朝岩永来。

午後評議会。

八月二十七日会見の経緯を桑田文学部長より詳細報告の後、種々質
問応答あり。

次で学部長会議の大略を余より報告。

大学は八月一日の評議会声明を基礎とし、文部省提示の仮案を参考
とし(参考といふ点に田中、舞出など例の調子で神経過敏なことを
いふ)具体案作製に決する。

評議会議題、

一、八月二十七日文部事務当局会談二関スル件、

二、選挙制度二関スル件(改正並其委員委嘱ノ件)(大学制度ヨリ切
り離スコト)、学部長会議、自主的ニ考ヘテヨキ時ニ直ス、緊急突
発諒承

三、八月一日ノ根本精神、

四、他大学ト連絡ニ関件、各帝大もそれ〴〵考慮中、在再日ヲ送ル
可ラズ。

五、声明書起草二関スル件、

大衆啓蒙、大学の使命、歴史発達、発達、抽象、貢献

(各個人に関するものは不可、弁明は不可、之等は個人)

総長名、

東京帝大に限、大学本質と実相、

内容は起草委員と総長とにて考へ、

批判、執筆者は誰とするか、実質

的、強、○選挙絶体不可

個人の問題に関する事、

特定部局に関する事、

思想問題に関する事は取扱はず。

発表時期(大学とすれば)慎

重、各学部教授会意向を聞く。

早くとも現下の問題解決後

起草委員を各学部に依頼す。

次で本問題は平素ならば大学制度審査委員会に諮り、後評議会の議
題とすべき性質のものなれ共、特殊事情あり休暇中もあり、在再
日を送るを許さざるを以て、評議会に於て取扱ふことを諮り、異議
なく可決す。

各帝大との連絡状況を報告し、各帝大共具体案作製の段階に入りし
如くなるを以て、之等と連絡をとる必要あり。起草委員中より両三
名総長が依頼することとなる。

大学の現状に対し世間之認識不足。誤解を正し、現行制度が大学の
機能を發揮する上に於て妥当なるものを、適当な時期に於て世に発
表することは必要なるべし。其内容は極めてデリケートなり。慎重
を要す。発表の形式、時期等も大い考ふるを要す。但し之は相当時
日を要するを以て、今日より起草委員を依頼することとしたしと述
べ、その通り決定、委員は各学部長とす。

内容に就て質問ありしを以て、余は前陳の範囲に止め、個人問題、特定部局に関すること及思想問題には触れることを避くる旨述べ。

終了後今井氏より今回の事件発生の裏面の事情、之が為に動きつ、ある各団体の種別等に付詳細観察を述べ、終りに法経の問題に対する弁明は一般的に取扱ふこととしても、結局個人の思想問題となる故、大学全体として責任をとる能はざることを述べ。

余は之に追加し、世間動向の樂觀す可らざること、大学の自治選挙に対する反感が教育界、文部省にも可なり久しき以前より存し居ることを追加す。

評議會終了後、学部長居残り、

具休案に付約一時間懇談す。江口、佐藤両氏より提案ありたるも、結局内規に就て、総長、学部長、教授の任用に関して問題となる諸点を定め、之に就て明日より協議することとなり、六時帰宅す。

帰宅後眩暈、頭痛甚し。八時早々就寝
起草

九月八日 木 晴

朝江口氏の来邸を求め、休養を必要とし、且つ起草委員は七学部長に依頼しあるを以て、余は成案出来るまで静観し休養すること、而して解決不能となる如き形勢になることは絶対に避くべく、此旨を佐藤、桑田両氏に特に伝へ置きたり。

午後江口氏より電話あり、此日の会合にては何も纏らず、明日より

具体的成案の検討に入ることとなりし由。

傷兵保護院事業部長持永義夫氏来邸、

結核療養所及温泉療養所（前者25、後10）に就て報告を聞き、その人選（医長、医員、看護婦）等、病院設計其他に就て意見を述べ、學術振興会結核委員会との連絡をとることの必要を説く。

終日休養

瀬田、堀諸氏の好意にて根岸正と八重子との問題着々進捗す。八重子も異存なし。

九月九日 金 晴曇

休養、

夕桑田、佐藤、江口三氏来、昨日、今日の学部長会議の経過を報ず。九時山川氏来会す。

九月十日 土 晴

朝今村氏上京、田宮氏も時を同ふして来邸、結核問題、大学問題等を語る。

十時半癌研、稲田博士と余の健康と将来の方針を語る。此日（森村）謙三家と稲田三之助家との間に結納の式あり。稲田氏縁続きとなるのも奇縁なり。

六大学リーグ戦始まる。第一戦帝大は優勝校明治と相対し0:0の引合となる。全軍の意気頗る振ひ心強き感を与へたる由。谷好投一安打を許せしのみ、偉とすべし。

九月十一日 日 晴

昨日朝及夜発作二回。

午後は神宮球場に赴く。帝明1:0にて帝破るも全軍の意気の旺なる苦闘、善戦は万場の賞讃を約す。

九月十二日 月 晴

四日振にて登学す。内田教授北支へ出張す。

増田教授北支より還る。

午後懷徳館に於て第三回小委員会、桑田学部長司会の下に開かれ、約二時間傍聴す。大学の立場より現制度の改善に関する案略決す。

第二議会に移る様子なり。協議員会を設けることにて意見一致せるも、同会に於て総長候補三名を選出する方法に就て相当論議せらる。

之迄、要項（大学独自の立場より攻究せるもの）

一、総長候補者選挙に関する事項、之に対する意見

イ、候補者資格（現行通り学の内外を問はず）

ロ、任期

a、約四年とす、再選を不可とする説多数（約四年は他の三帝大が四年とるため）

b、再選を廃すとせば五年の現行を可とす。

c、特別の場合再選までは差支へなし。

d、何回にても重任差支へなし。

ハ、協議会 設立必要（現行通り）但し協議員の数を現行三名を改め四名とすること、候補者三名を選定すること、

協議会ニ於テハ候補者全部ニ就テ説明行フセ否ヤ、

右候補者、第一、第二、第三ノ順位ヲ附スルヤ否ヤ、且ツ之ヲ

教授会ニ報告スルヤ否ヤ、

ニ、選挙ノ方法

記名、無記名ニ関シテハ一般論トシテハ一応無記名ヲ可トスル

モ、次ノ如キ意見アリ。

イ、形式ハ記名ナルモ実質は無記名に近キ方法（丹羽）

ロ、記名、無記名ハソレ程重大ナル問題ニ非ズ、大学ノ根本精

神ヲ害スルモノニ非ズ（石原）。

其他佐藤（教授ノ場合ハ無記名絶体必要、総長ノ場合ハソレ程問題ニ非ズ。用語を修正して無記名にては如何（寺沢）

ホ、候補者は投票の過半数を以て決す。

ヘ、被推選者の数 一人とす？

二、学部長選挙に関する事項

教授の互選に依り、無記名とす。

任期は約三年とす（一年は短きに過ぐ）。

再選に関する意見種々あるも学部都合による。

再選は之を認めず(工)。再選三選差支なし(医)。原則を三年とし、一年以内延期することを得(文)。

三、○教授推薦ニ関スル事項

原行制度ヲ可トス。助教授同様。

九月十三日 火 曇晴

登学せず、一時昨朝逝去せる東教授父藤九郎弔問の爲の石神井に向く。昨解剖の結果、脳軟化症予後肺炎なること明かとなりし由。夕之も昨日死去せる有賀長文氏邸を弔ふ。

昨日ヒットラー総統ニユルンベルグ党大会最終日に於てチエコ、スロバキアのズデーテン独逸問題を中心とせる大演説を行い、歐洲は勿論全世界へ多大の衝動感激を与ふ。

十二日夜独逸大使館Otto大使招待会に出席。

主賓はハイデルベルグ大学教授(英文学) Yeh Roof Hobbなり。駐滿新独逸公使(元大阪総領事)、Roif 其他、邦人は林増太郎、市川富蔵、木村三教授、その外数名、Alin Weelnの説演殊によろし。食後も長く懇談す。

九月十四日 水 晴

九時—十二時懷徳館、学部長會議に列席。

一時より石原、寺沢、丹羽三学部長と共に石神井東家の告別式に列す。

九月十五日 木 晴

大学、

朝井上勝純子危篤の報に接し、葵町邸を見舞ひたるに既に逝去せる後なり。数日前より食道癌肺に穿孔し急性肺炎を起し居たるが、今朝来急変心臓麻痺にて終に仆れたるなり。

対文部省案、此日の協議会にて稍目算附きたり。

京都側と電話にて交渉の結果、明日桑田、田中、江口三氏蒲郡に赴き、先方宮本、小島、中村と会見することとなる。

小野塚氏と食後約一時間半懇談、余の健康状態に就て散日前稲田氏より余の心中を告げ、激職に止まるの不可を告げし由、小野塚氏も事情を充分諒解し、健康問題ならば止むを得ずとの意見なり。併し出来得るならば、此際少しにても長く大学に止まることが大学のために望ましき希望を述たり。河合氏のことにも就ても語る。

九月十六日 金 曇

大学、

○北海道帝大小熊教授来、大学問題に就て語る。

○早稲田大学総長(田中氏)より来月廿五日大隈侯生誕百年祝賀会に祝辞を述べること依頼せらる。承諾す。

○東北帝大宮城工学部長来、丹羽工学部長と懇談。

○此日朝桑田、田中、江口三氏蒲郡に赴く。京大三氏と会談のためなり。

午後舞出、上野両評議員を招致し、河合氏の言論が数年来問題となり居たる所、昨今に至ります／＼その非難高まり、現今帝大に対する攻撃の約80%は同氏に向けられ居ること、其著フツシズム批判を一読するに不穩当の言辞少からず、伏字の非常に多き所もあり世の誤解疑惑を招くこと当然なり。此際河合氏は少くとも同書の絶版を自発的に行ふこと必要なり。之事を総長として貴下等に正式に警告す。此旨河合氏に伝達せられたし。尚河合氏と面合してもよろしいふ。

井上家に赴く。夜森村男来邸、明朝局所解剖を行ふこととなる。緒方教授に依頼す。

永井潜氏より依頼ありたる北京医科大学病理教授は、昨日緒方、三田村両氏来邸の節人選を依頼したるに、福士氏然るべしとのこと、余も同意し昨夜会談の結局福士氏承諾せる由。

善郎来る。大学問題と余の健康を心心配してゐる。

〔欄外・河合著書絶版を正式に希望す〕

九月十七日 土 曇

四日に亘る防空演習昨夜十時にて終る

九時河合、舞出両氏来、河合氏著述に就き考慮を求む。

十時井上邸局所解剖、緒方氏執刀、滝沢其他二氏補助、ドライアイス利き過ぎて解剖困難なり。熱湯、湯タンポなどにて石の如く硬化せる組織を温むること約三十分、漸く刀を執るを得たり。検査の結果は想像之如く食道下端之癌右肺に穿孔し肺炎を起こしもの、ラ

ヂウムの効果可なり顯著なることも明となる。緒方氏を送り、癌研に赴く。二時帰宅す。

夜田宮氏来、種々懇談す。田宮氏は氏一通な観察と意見とを有す。

九月十八日 日 晴

九時青山祭場井上葬儀並に告別式に玉子同道列席す。十一時帰宅。

午後神宮プール、全国大学競泳を観る。慶応優勝す。

此夜日比谷公会堂に於て例の連中大々に帝大攻撃の演説会を開く。玉子、道子、太郎等出掛く。聴衆の半は帝大生なりし由。

九月十九日 月 晴

朝山川氏来。

九時半眩暈発作稍強く起り頭痛耳鳴を伴ふ。終日臥床す。午後一時坂口氏来訪す。

此日起草委員会開かれ、夜佐藤、桑田、江口三氏委員会決定の第一案を示す。体裁は漸く整ひたるも、選挙の方法の一点に依然疑義あるは従前の通りなり。情勢好転に引きづられたる傾あり。

京都側と再会見の要あり。江口氏京都と電話にて打合せの結果、明夕熱海ホテルにて落合ふこととなり、東京よりは桑田、佐藤、田中、江口四氏出掛ける筈。

九月二十日 火

休養。

小宮豊隆著「夏目漱石」を読む。好著なり。

チエコ問題、英仏協同して独逸の希望の大部分を容るることとなる。解決近かるべし。元々ヴェルサイユ条約に於て英仏が幾多の民族より成る国々を合せて造り上げたる不自然極まる人工産物なり。澳洪國を極度にいぢめ独逸に対抗する一國家を独逸の東隣に造り上げ、西の仏と相結んで独逸に當る攻守同盟まで結び、近年は露西亞をも之に参加させるため露仏の間に協約を結びたる等、目的は澳獨の再起不能を主眼としたる政治工作なり。然るにナチ独逸の興隆と実力とは曩にザール地方の独逸復帰となり、今春は独澳の合併となり、今又ズデテン独逸は事実上独逸の一部となる。寧ろ当然の帰結なり。チエンバレーン英首相がヒットラ總統を訪問してひたすら独逸の激憤、実力行動を制すべく努力した。他方仏國を説得せるの結果、茲に至りたるものにして、チエンバレーンの行動は大政治家として賞讃に値すると同時に、大英帝國の首相として急遽飛行機でヒットラーを山莊（ベルヒテスガーテンの）に訪問するの外、解決の方法なきに至らしめたる独逸、殊にヒットラー總統の力は大了たものである。此夜岩永夫妻軽井沢より帰京、来邸す。

九月二十一日 水 晴

休養を續く。気分稍良しきも未だ平常ならず。盆栽の手入。「夏目漱石」の耽読など専ら静養につとむ。

松岡冬樹死し、此日横浜に於て告別式あり。代理を派し香奠を贈る。

九月二十二日 木 晴

休養、

朝田宮氏来る。大隅侯祝辞の材料蒐集その他を依頼す。

植村卯三郎（同期卒業生）八幡製鉄所病院長を辞し東京に移住、来邸、傷兵保護院の事業に就て語る。

夕江口氏来、東京京都熱海会談の概要を語る（熱海ホテルに於ける。東京。桑田、佐藤、田中、江口。京都。宮本、小島、中村）。京都は東京案に就て今一応相談の上返答することとなりし由。其上にて東京の態度を極めることとなるべし。

仙台、北海道も東京案を齎らして帰学す（昨夜）

両者共若東京案にて通過すれば異存なきも、「方法手続を内密とする」の一点に疑義を抱くもの、如し。京都も同様、九州、大阪は妥協案に賛成なるも、東京、京都の動向を暫く静観するもの、如し。何れにしても明日中には京都より回答あるべく、其上にて第二段に進み、意見岐るる時は多数によって決するの外なし。夜、南氏来。

九月二十三日 金 曇

朝桑田氏に電話にて京都回答到着の上は至急事を運ばれたき旨を通す。海沢小二郎（医博）山岡万之助氏代理として来邸、来月四日日本大學創立五十年祝賀会に祝辞を寄せられたき希望なり。之を諾す。

八重子と上野美術協会に独逸展覧会を觀る。一週間振の外出なり。夕刻桑田氏来邸、京都側との会談之結果を報ず。来週中には是非解決するやう進行を懇請す。

九月二十四日 土 曇、細雨

朝玉子と共に松方邸を訪ふ。先日來松本重治上海にて大患に罹り済民病院に入院中之由、医療其他に付一昨日來岩永とも数度打合せ居たるが、母堂光子も丁度來り合せたれば種々注意を与ふ。明後日飛行機にて上海に向ふ由、之には犬養専ら便宜を与へ居たり。

坂口氏來、昨日桑田氏に余の健康状態を打明けたる由、之は佐藤氏以外には口外せぬやう依頼す。坂口氏も此辺の機微を能く諒解し居れり。

九月二十五日 日 晴

午後神宮球場、帝早4:0にて敗れたるも由谷の好投激賞に値す。

松本光子上海出發（重治看護のため）挨拶、種々加療上の注意を与ふ。

九月二十六日 月 晴

一週間振りて登学、來客、大阪木下、瀬田。

夕刻九州帝大庶務課長久保田氏、江口氏同道來邸。九大が去廿二日決定せる具体案を示し、可成早く六帝大総長會議を開き事を片付きたき荒川総長の意を伝ふ。連絡委員と共に來月二日各帝大総長の会合を為すことを決す。

五時半桑田、佐藤、江口会見の筈なるに付、右の伝達を依頼す。

九州案、協議員五人、総長の候補者二名以上、署名による意見提出（之は最後案）。

九月二十七日 火 曇

大学、桑田、江口。
各帝大との連絡現状

京都、東大案に就て攻究し近く回答する（熱海会見）。大阪及福岡との連絡に當る。

大阪に書記官を派した。

東北、過日宮城工學部長上京の際、東大案にて行き得るならば結構なりと言ふ。評議會に於て小委員會に附託し、目下東大案を中心として攻究中、近く回答ある筈。

六帝大の一致を懇望。

九州、総長は最初の申合せ通り総長中心主義にして、可成早く総長會議を開きたき希望。

久保田事務官之言に、去22日最後案あるもの出來す。

連絡之まで充分ならず、単独にて進みたる形、東京からの連絡にも足らざる所ありしも、明日久保田婦福一切を話し、又余より荒川氏に昨日飛行便にて公式に従来の文書を送附したれば、30日朝までには先方より東京案に対する回答（電報）來る筈。

北海道、東京案絶対支持。

起草委員會を送る。

大阪、楠本一任、意見なし、
三十日までには各大学の意向も判明すべく、其上にて小委員中の連絡委員が文部省と内談をすることが適當なるべし。

夕刻桑田氏より電話あり、文部省より明朝九時会見申込あり、事重大なれば直に参邸すべしとて、五時半各学部長及江口書記官来邸す。文部省は各帝大に夫々個別的に会見を為す考にて、現に夫々打電せること、東北及北海道の電話にて判明となる。東大としては明朝九時には会見出来ぬ、延期を希望することとなる。

此夜独逸大使（オット）より招待せられ居たるが、之は謝絶す。

各大学と略連絡が取れる段取となりし時、文部省は余りに各帝大の回答遅きに我慢出来ず此挙に出たるもの如し。

山川、有光両氏来邸することとなり、昨十一時まで会談、山川氏の熱誠に動かされて近く会見（懇談の形となる。始めは具体案を持って来れとのことなりし）することとなる。

此夜七時頃激痛あり眩暈起り頭痛を伴ひ、中途退席約一時半、道夫の部屋にて静臥の後就寝す。

九月二十八日 水 晴

終日頭痛強く、臥床。

朝坂口氏来、南氏と来る。江口氏昨夜の経過を簡単に報告す。両三日休養することとなる。

此日午後京都の人々文部省側と会見す。

九月二十九日 木 晴

休養

大阪、文部省と会見、

「日々」に余病に仆るとの報導あり見

夕桑田、佐藤、江口氏来る。舞客、電話電報など終日大多忙なり。独逸チエコ問題、昨日ミュンヘン総統の家に於て、英チェンバレーン、独ヒットラー、伊ムソリーニ、仏マド 四巨頭の会合によりて最後の決定を為すこととなる。此所まで来れば戦争にはならぬこと明なり。

九月三十日 金 曇

宇垣外相突如辞職す。对支院官制に不満なるは表面の理由なるが如きも、他にも複雑な事情ある如し。

見舞人多し。南、斉藤鶴子、植村等。

岡田傷兵保護院副総裁来、来る三日特別の恩典ある由。

江口氏より電話あり。本日有沢助教教授、大森、阿部と共に起訴せられたる由、有沢の手続は明日教授会を経て上申書する（休職）。

今裕氏来。本多、今両総長の意向□す。

（なかの みのる 元東京大学史史料室員・立教大学史資料室）
（てるぬま やすたか 元東京大学百年史編集室員・文部省）